

小児科 磯島先生に後天性視床下部性肥満の治験について伺いました。

「後天性視床下部性肥満とは」

視床下部は、脳と体をつなぐ間脳に位置しており、ホルモン分泌や自律神経の調節を行う重要な役割をしています。具体的には、体温の調節、摂食行動や代謝の調節、体液恒常性の調節、睡眠・覚醒の調節、性周期・生殖行動の調節、ストレス応答の調節などを行っており、体の司令塔とも言える場所です。

後天性視床下部性肥満とは、視床下部が腫瘍、脳手術、外傷などによって後天的に障害されることにより、空腹や満腹を感じさせる信号を脳に送る情報伝達物質やホルモンの働きが妨げられ、体重増加をコントロールできなくなることで生じる肥満です。後天性視床下部性肥満の治療は、単純性肥満よりもはるかに抵抗性であり、これまで食事療法、運動療法、薬物療法などが行われてきていますが、現在のところ十分に有効と言える治療法はありません。



「後天性視床下部性肥満に対するセトメラノチドの治験」

視床下部に存在する食欲を抑制する働きのあるプロオピオメラノコルチン神経は、 α -メラノサイト刺激ホルモンを産生し、主にメラノコルチン4型受容体を介して摂食を抑制します。セトメラノチドは、視床下部のメラノコルチン4型受容体に作用し、ホルモンの働きを補助することで、視床下部障害が原因の肥満に対する治療が可能になることが期待されて開発された治験薬です。セトメラノチドは、すでに米国、カナダ、欧州連合、英国及びイスラエルで IMCIVREE[®] という名称で、特定の遺伝子変異を原因とする希少な種類の肥満及び空腹感のコントロールの治療に用いられています。

今回の治験は、プラセボ対照二重盲検ランダム化比較試験として、世界中の合計143人（日本からは12人）の4歳以上の後天性視床下部性肥満の患者さんに対して、セトメラノチドとプラセボ薬（偽薬）が2対1の割合で投与され、セトメラノチドが後天性視床下部性肥満の患者さんに効果があるかどうかを評価する目的で行われています。当院からもこの治験に4名の患者さんが参加しております。

セトメラノチドが後天性視床下部性肥満の患者さんに効果があるとわかれば、これまで治療が困難であった患者さんにとって朗報であり、大きな期待となります。

（小児科 磯島 豪）

患者さんに効果が高く安全に使用できる薬をより早くお届けできるよう、皆様のご理解とご協力をお願いいたします。



問い合わせ 本院治験事務局 3400、CRC室 3410 分院治験事務局・CRC室 5317